

若者たち  
グルマーイについての話  
バースデーブリス(誕生日の至福)を祝って

グルマーイの話 1  
シャクンタラー・シーゲル

それは 2011 年6月、グルマーイの誕生日の月のことでした。私たち家族は、6月 24 日の週末にシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムに来るよう招待されていました。そして、私たち全員、特に娘のプレーマとサーリカーは非常に興奮していました。6月 24 日の大変待ち望んだ日が始まると、その時に3歳だった下の娘のプレーマは、とても良い機嫌で目覚めました。彼女が最初に——非常にきっぱりと——言ったことは、「グルマーイは今日の誕生日パーティーに来て、円い帽子をかぶっているのよ！」でした。

さて、あなたは、プレーマは小さな赤ちゃんだった時以来、アーシュラムに行っていなかったことを知っている必要があります。私たちの知る限りでは、彼女はグルマーイと一緒にいた記憶がありません。娘はどのようにして、グルマーイが来るかどうか、そして何をかぶるかを知ることができたのでしょうか。

昼前に、お祝いの一環として、ワークショップが SYDA ファウンデーションのスタッフと訪問セーヴァイトたちのために、シュリー・ニーラーヤのホールで開催されていました。私の夫のエイサは、そのイベントの司会者としてセーヴァーをささげていました。ワークショップが進行している間、私は子どもたち用のホールで、遊んでいるプレーマ、彼女の姉のサーリカー、そして他の何人かの子どもたちと一緒にいました。

ワークショップの締めくくりに、グルマーイはシュリー・ニーラーヤに入り、自分の椅子に座りました。そして、本当に、円いつばの帽子(または、3歳児が「円い帽子」と言うもの)をかぶっていました。グルマーイに、お誕生日おめでとうございます、と幸せを祈った後に、私の夫は興奮を抑えることができずに言いました。「グルマーイ、私は、今朝私の3歳の娘プレーマに起きたことをあなたに話さなければなりません。彼女が目覚めて、最初に私に話したことは、『グルマーイは今日の誕生日パーティーに来て、円い帽子をかぶっているのよ!』でした」

グルマーイは輝くばかりにほほ笑みました。それから、その帽子をかぶった理由があるはずだと知っていたと話しました! グルマーイはその朝、帽子をかぶるつもりではなかったと言いました。しかし、ワークショップに来るために出掛ける時に、帽子を見ました——そしてそれを取りました。「そうです」と、グルマーイは言いました。「私は彼女のためにそれをかぶったのです!」

その時、私は娘たちとシュリー・ニーラーヤの後ろの方に入っていくところでした。ワークショップの終わりの熱烈な「サッドグルナートウ・マハーラージ・キー・ジェイ」の後、グルマーイは椅子から立ち上がって、ホールの後ろの方にいた私たちに向かって真っすぐ歩き始めました。大きなほほ笑みを浮かべて、私たちの所まで真っすぐに大股で歩いてくると、3歳の女の子を見ました。そして私に、「プレーマ?」と尋ね、私は「そうです、グルマーイ!」と答えました。

それから、グルマーイはプレーマの目の高さまでひざまずき、「そうよ、プレーマ! 私はあなたのためにこれをかぶったのよ! 本当に…私はあなたのためにこの帽子をかぶったのよ!」と言いました。プレーマはうなずきました。

その貴重なやりとりを間近で見て、私は嬉しくてたまりませんでした。そして、私のグルが私の娘にたくさんの愛情を注いでいるのを見て、心を動かされました。私は、本当に意味深い何かが起こっているという感覚がありました。グルマーイは、プレーマと直接通じ合っていました。そして私は、彼女たちが二人ともお互いに、私には神秘的と思えるレベルで理解し合うのを感じ

ました。それから、グルマーイはその場を離れる前に、プレーマに大きな抱擁とキスを与えました。

私は神秘的な共時性のこの体験をしばしば思い出します。その時アーシュラムで最も若かったプレーマには、全く自然なことのようにでした。グルマーイは、大きな尊敬を持ってプレーマに話し掛けました。そして、魂と魂が触れ合う、二人だけが本当に理解し合うような方法で通じ合っていました。

これは、あらゆるものの大いなる自己と一体であるグルは、彼女を愛する者と常に通じ合っていることを強力に思い出させるものとして、何年もの間私に残りました。そして、もし私たちが幼い子どものように、心が開いていて、マインドが妨げられなければ、私たちは、はっきりとその内なる対話に気づくことができます。

今日まで、プレーマは、今は 10 歳になりますが、非常に特別なこととして、しかしとても自然なこととして、その瞬間を思い出します。最近私が、それをどのように覚えているか尋ねた時、プレーマは言いました。「私は賢かったわけではないの。ただ知っていただけ」。そして笑顔で、「グルマーイはすべてを知っているのよ」と付け加えました。

\*\*\*

## グルマーイの話 2 ヴァニ・アグラワル

1980 年代初め、私はグルデーヴ・シッダ・ピートゥに住む、若いグルクラの生徒でした。テンプルやサマーディ・シュライン、中庭など、アーシュラムの全部が大好きでした。

私は花と木々が生き茂る美しい庭園が大好きでした。ご存じかもしれませんが、庭園内には、マンゴーやジャムン、ジャックフルーツ、グアバなど、果樹が何種類もあります。

冬になると、アンナプールナー・ダイニングホールの近くにある1本のグアバの木には、いつもおいしい実が鈴なりになっていました。

私たち若者は、グアバが大好きでした！ 毎日、アンナプールナーへ行く道すがらこの木のそばを通り、枝から垂れ下がっている黄金のグアバを切望のまなざしで眺めたものです。

そして毎日、地面に半分ほど食べられたグアバが落ちていました。リスやオウムたちがそのごちそうにあずかり、食べ残しを落としていったのです。

私たちもグアバが食べたくて仕方がありませんでした。仲間うちの数人でそのことを話し合いました。そして、アーシュラムの木々から果実を摘み取ってはいけないと分かってはいましたが、私たちの無限の知恵により、鳥や動物がアーシュラムのグアバを食べられるのならば、私たちだって食べることができると決めたのです。

私たちはある計画を立てました。

ある晴れた日の昼食後、他の人たちが部屋に戻ったりセーヴァーを再開したりしている時、私たち小さな盗賊団は、グアバの木に向かいました。周囲に誰もいないことを確かめました。木登りが得意な一人の女の子が、その木に登ると買って出ました。その木はそれほど高くなかったので、全員が賛成しました。

私たちは木を囲んで集まりました。彼女はよじ登ると、熟れたグアバをもいでは下に投げ、私たちはそれを受け取りました。

グアバを5、6個取った頃だと思います。突然、深く響く声が聞こえました。私たちがよく知る人の声です。「यहाँ क्या चल रहा है?」「何をしているの?」

私たちは一瞬身が凍りました。そして後ろにいるグルマーイに背中を向けたまま、木の上にいる友人を置き去りにして、一目散に逃げ出しました。木の上の友人もグルマーイを見た瞬間に木から飛び降り、グルマーイのすぐ足元に着地しました。そして急いで立ち上がると、振り返ることなく逃げ出しました。

その日の午後はずっと、私たちはお互いを避けようとしていました。誰もがこう思っていました。「ああ神様、何てことをしたのでしょうか。アーシュラムの果実を取ったばかりか、グルマーイから逃げ出してしまった。これからどうなるのかしら?」

その夜、驚きと喜びに満ちた出来事が起こりました。グルマーイからプラサードを受け取ったのです。それも、籠いっぱいグアバを!

後に、今回のとっぴな企てに関わった女の子それぞれが、同じプラサードを受け取ったことを知りました。

そしてこのプラサードと共に、それぞれがグルマーイからあるメッセージを受け取りました。

グルマーイのメッセージは、このようなものでした。「यदि तुम्हें कुछ चाहिए तो माँग कर देखो। हो सकता है वह तुम्हें मिल जाए या हो सकता है न भी मिले। पर महत्त्वपूर्ण बात यह है कि तुमने वह किया जो सही था।」「何か欲しいなら、頼みなさい。あなたはそれを得るかもしれないし、得ないかもしれない。でも、それであなたは正しいことをしたのです。そのことが重要なのです」

私は、グルマーイのプラサードと、間違いからしっかり学んでほしいというグルマーイの意図に、とても大きな愛を感じました。

グルマーイがくれたこの教えは、いつも私の指針になってきました。そして何度も何度も、人生において正しい決断ができるよう導いてくれました。

तहे दिल से शुक्रिया गुरुमाई। グルマーイ、心の底から感謝します。

\*\*\*

### グルマーイの話 3 リーラーヴァティー・スチュワート

1999年9月、グルマーイは「教えの旅」のツアーで、グルデーヴ・シッダ・ピートウを訪れていました。私はセーヴァーをささげるためにそこへ向かい、生後約6カ月の息子ジャスティンを連れていきました。初めて母親になった私は、この美しく活発な赤ちゃんの欲求を満たす方法を、実際に子育てをする中で学んでいました。

私たちが滞在している間、グルマーイはよく中庭に座ってダルシャンを行っていたものです。私も息子とよくダルシャンの場に座っていました。彼がぐずって泣き出すと、私は手をたたいたり歌ったりして、息子を笑わそうとしたものです。彼のご機嫌を取るのに必死でした。

ある日、滞在している宿舎でジャスティンが昼寝をしている時に、グルマーイが訪ねてきました。グルマーイは、息子が泣くたびに、私が彼の機嫌を良くさせようと楽しませ始めることに気づいたと言いました。そして、母親の役割について、とても素晴らしい話をしました。それは、愛する

こと、育むこと、子どもの安全を守ること、子どもが快適であることを保証すること、そして彼らの幸福を見守ることです。グルマーイは、私が息子の機嫌をいつも良くしようと、息子の「娯楽」になってしまったなら、彼の人生で後々、その代償を払うことになってしまうかもしれないと言いました。そのようにしていると、彼が不快に感じている時に、自分でどうするかを学ぶ妨げになるかもしれない。孤独感や不幸から目を背けようと、間違った人たちを「娯楽」として自分の人生に持ち込むようになるかもしれない。赤ちゃんの時に自分の気持ちと共にいることから目をそらしてしまうと、大人になって、自分の本当の気持ちから目をそらそうとし、自分のために物事を考え抜く能力を失いかねない。彼は自分のことを決めるのに、他人に頼るようになってしまうかもしれない、と言いました。

私はグルマーイに心から感謝し、その教えをすぐに実行し始めました。息子が泣くのをやめて私が望む状態になることにエネルギーを注ぐ代わりに、息子が何を伝えようとしているかに耳を傾けるようにしました。そうすることで、空腹なのか、寒いのか、疲れているのか、退屈なのか、ただおむつ交換が必要なのかなど、彼が今必要としていることに、より素直に対応できるようになりました。私は、グルマーイの考えが分かり始めました。息子は、本当は楽しませてもらうことを望んではいなかったのです。彼は、私に母親になってもらいたかったのです。

私の育児が、より楽で効果的になり、息子はもっとリラックスして自立的になりました。夫は私にこう言ったものです。「君はとてもすばらしい母親だね。どうしてそんなにうまくできるの？」私はこう答えます。「グルマーイが教えてくれる母親になる方法に、耳を傾けているからよ」

グルマーイからこの指導を最初に受けて以来、もう 18 年近くたっています。そして私がはっきりと言えるのは次のことです。息子は自分自身と共にいることを愛しています。彼は積極的に自分自身の針路を設定し、自信を持ってその方向に帆を設定します。彼はどういう人と時間を共にするかをはっきりと見定めています。息子の人生の展開を見ていると、それは、子どもが

自らの足で立つことができ、自分のことをしっかりと理解しているようになってほしいという、母親の心からの願いへの答えです。

私の子育てはグルマーイの愛と指導に根差しています。私の心の目には、私の子どもたちが、そのまた子どもたちのためにこの教えを引き継いでいくことが見て取れます。

ありがとうございます、グルマーイ。



© 2017 SYDA Foundation®. 著作権所有。